

郷土室だより

八町堀襍記 一一

安藤 菊二

○白河楽翁公と公の文化事業

江戸の地域史を考える場合に、地域内に存在した大名屋敷がその地域にどれほどの影響をおよぼしたか、従来ほとんど注意が払われるところがなかった。

注意を払うどころか、まるで無視されてきたという感が深い。できればもう少し地域との関係を掘り下げてみる必要があるのではないか。八丁堀に存した白河藩邸の存在は、特にその感を深からしめる。八丁堀の白河藩邸には、松平楽翁が住んでおられたのみでなく、晩年には築地の浴恩園に退老して、悠々自適の生活を送られた。そうしたことが一層公を身近に感じさせるからである。白河楽翁公の事績は、すでに衆知のことであるが、区史に記述を欠くので、河出書房版『日本歴史大辞典』に載る北島正元先生の記述を写して、その缺を補わせていただく。

松平定信まつだのぶ（一七五八—一八二九）江戸時代後期の政治家。田安宗武の第七子。徳川吉宗の孫。白河楽翁ともいう。一七七四（安永三）年、一七歳で奥州白河城主松平定邦の養子となり、八三（天明三）年一〇月そ

の跡を相続し、陸奥・越後両国で十一万石を領した。そのころ相つぐ凶歳のため領内の窮乏が甚だしかったが、定信は儉約を命じ、文武両道の伝習、普及を促す一方、藩財政の立直しをはかったので、ようやく領民の生活は安定した。八七年清潔な人柄と治績による名声を買われ老中主座となり、田沼意次失脚後の幕政を担当することになった。定信は希代の読書家で、政治については理想と抱負を有していたが、翌年江戸霊巖島吉祥院に冥助を祈った願文を捧げ、鏡意幕政の振起にとめようとした。彼の改革のおもなるものは、財政面において諸般の緊縮政策であったが、重要な特色は、重農政策と商業資本の抑圧である。さらに幕府の財政整理にあたっては享保の改革にならい徹底した支出の抑制をはかり、奢侈品の売買禁止とならんで風俗肅正や出版の取締りを行った。又混乱した学界にも統制を加えようとし、一



守國院様御自画御像

撥亂而反正
肯善而引患

明七年歲次丁未夏六月
源定信自寫

松平定信公自画像（鎮国神社蔵）『桑名市史』補篇より

七九〇（寛政二）年に異学の禁を命じている。その他江戸の町費の余剰を積立てた七分積金の法、無宿や囚徒のため石川島人足寄場をつくり、正業につかせようとするなど、いわゆる寛政の改革を断行した。一方このころから、西欧諸国との外交問題が表面化し、ロシアが近海に出没するようになり、そのため海防に急を要する情勢であった。定信の政策は

民生の安定と幕威の振興とを期して行われたが、その努力にかかわらず劣多くして功少なく、当時の人心は必ずしもこれを喜ぼうとはしなかった。自由と遊蕩に馴れた人々をして「万代もかゝる厳しき御代ならば長生しても楽しみは無し」と嘆息させはじめは「文武両道左衛門世直殿」(よなおしどの)などと歓迎した江戸の民衆も、厳しい緊縮政策にすっかりあきってしまった。旗本植崎九八郎のごときは、公然と定信の政治の欠陥を論評するほどで、その他巷では狂歌・落首・小説を通して譏刺するものも少なくなかった。

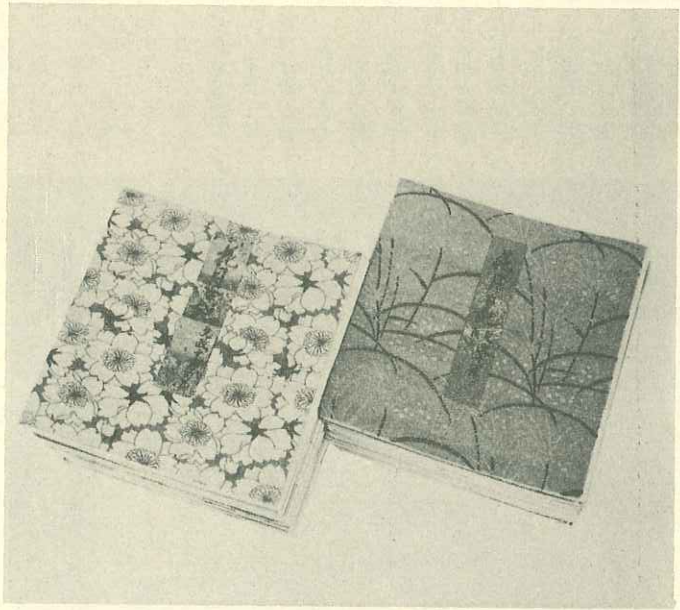
定信の失脚の直接原因は、光格天皇が父の典仁親王に、太上天皇の称号をおくろうとするのに反対した、いわゆる尊号事件であったといわれている。一七九三(寛政五)年老中職を辞任し、再び落治に精励した。彼は学問・文芸にも通じ、自らの研鑽によって著書も多く、「花月草紙」「宇下人言」「国本論」「修身録」など一八二部にも及んでいる。

(北島正元)

右に引いた北島先生の文章に見られるように、定信は寛政五年に突如として幕府の老中職を解かれた。時に定信はまだ三六才の壮齡であった。以後定

信は専ら力を藩政にそそぐことになるのであるが、『福島県史』は、定信の文化事業の遂行は、彼の後半生にあると見てよいとして、楽翁公の著作の目録を掲げている。掲記すると、次の如くである。

- | | |
|------------------|-----------|
| 集古十種 八五巻 | 古画類聚 三八巻 |
| 車輿図考 一六巻 | 石山寺縁起絵巻補欠 |
| 平家物語画図 一四巻 | 大内裡考証 |
| 公余探勝画巻 | 楽曲 一〇〇冊 |
| 公文書部類 八二冊 | 白河風土記 二八冊 |
| 退閑雜記 一三冊 | 同後篇 五冊 |
| 積善集 四冊 | 花月冊子 六冊 |
| 花月日記 三四冊 | 楽亭妙楽集 三七冊 |
| 楽亭文稿 三冊 | 独看和歌集 一冊 |
| 麗玉集 六冊 | 上京紀行 二冊 |
| 茶道の書 六二冊 | 宇下人言 四冊 |
| 山の井、三草集など 一七〇余部。 | |
- (福島県史20、文化1、四〇頁)
- 『福島県史20、文化1』は、なお筆を次いで、これら著作の内の重要な編纂物について解説を加えて記すところがある。
- 『集古十種』は『日本歴史大辞典』(河出書房、昭和三十三年版)によると、刊行年月不明、全八五巻、楽翁が老中辞職後ひろく編さんしたもので、十種とは鐘銘・碑銘・兵器・銅器・楽器・文房具・扁額・印章・法帖・古画、収録品数二二〇〇余点、広瀬

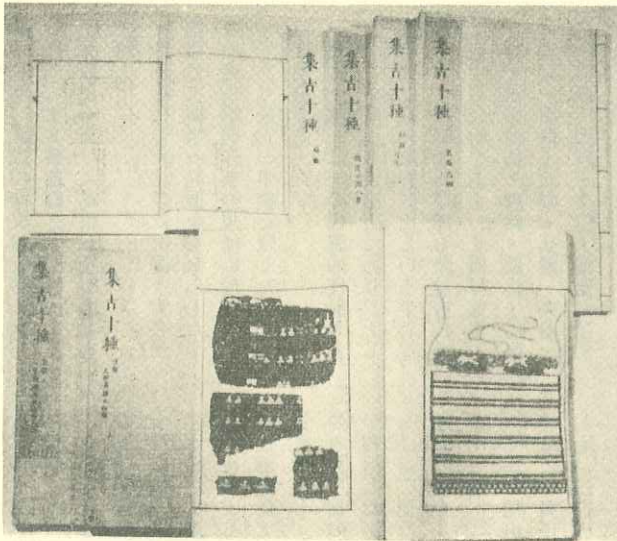


花月日記浄書本は華麗な裂表紙をつけ、色替りの具引き紙を料紙とした樹形綴葉装で、題籤は左肩又は中央に「花月日記」。この装訂は定信自らが行った。

(写真・説明文とも『天理ギャラリー第68回展松平定信』目録より)

典が生命を帯びて書いた序文があるとなつている。楽翁が多額の費用を投じ、谷文晁・閑松堂白雲・松平家御抱え絵師巨野泉祐(大野と綴る)の三人に命じ、全国の諸社寺、大名屋敷などに珍藏する宝物中の重要価値するものを模写または写生し、それに寸法・出所を詳記、木版ずりとして出版したものである。今日の考古学、文化財保護、国宝・重要文化財の指定などの仕事をいっしょにしたような事業で、これを個人の手でなし遂げた点に大きな意義がある。これに掲載されたもので、今日国宝・重要文化財・重要美術品に指定されているものが少なからずあり、同時に天災・地変のために失われたものも沢山あり、かけがえのない貴重な文献だ。

ところで『集古十種』は、谷文晁一



集古十種（『桑名市史』本篇より）

人で調査したように古筆了仲の『扶桑画人傳』藤岡作太郎の『近世絵画史』が書いています。それは誤りで、おそらく『扶桑画人傳』が誤記、『近世絵画史』もその誤りを受けついでものだろう。事実は前記三人が分担した仕事で、むしろ文晁の受持が一番すくなく、白雲と泉祐が大部分の仕事をしている。

楽翁の侍臣田内親輔の記録になる「楽翁公著書目録」にも

の泯没せむことをいたく愁ひなげき給ひ、いまだ御歳若き時より企望し給ひて、諸侯の珍藏、寺社の什物のたぐひ、御手筋の及ぶだけは乞ひ求めて写し置き給ふものおびたし。御退職の後、白川常宣寺の住持退隠して白雲といふ、書画好古の癖あれば、是れと画工巨野泉祐に命ぜられて、五畿内中国のあたりまで行き募写して来る者殊に多し。又奥州の方へは谷文晁を遣はされて種々写し来り云々とあり、白雲および泉祐にあずかるころ

大なる旨が述べられていて、この記録は、最も信頼できるといふことができよう。とにかく楽翁の美術研究と文化財保護の趣意と努力を物語る最上の遺産といつてよい。

『古画類聚』（三八巻）これまた楽翁編さん中の重要なものの一つ。『集古十種』の続編のよ

うなもので、主として古名家の肖像・人形・服章などを、百数十か所の社寺その他の画像・木像から縮写したものを主とし、宮室器財・兵器・文様などを類聚図写したものの。歴史学上の好資料である。

『車輿図考』（一六巻）稻村行教・橋本経亮・屋代弘賢らが楽翁の命により考証にあずかったもの。正副二冊、正本は渡辺広輝、副本は金子文宝の画である。広輝は住吉広行の門人、楽翁が古絵巻から図写させ、それに考証を施したもの。正本の考証は楽翁の自筆である。文化六年（一八〇九）白河城火災で大半焼失。現在零本三巻を残すのみとなっている。副本は、松平家に今なお保存されている。

『石山寺縁起絵巻』補欠。この絵巻の第一、二、三巻の絵は、御物の「春日靈験記絵巻」の筆者高階隆兼、詞書は石山寺座主果守親王の書いたもの。第四は土佐光信の挿絵、三條実隆の詞書。第五は絵が栗田口隆光、詞は二条為重といわれるがはっきりしない。第六、七は飛鳥井雅章の筆といわれる詞書があるだけで肝心の絵が欠けている。楽翁はこれを遺憾とし、文化年中谷文晁に命じ補作させた。文晁は一代の光榮とし、隆兼

の筆意にならない、りっぱに描き上げた。文晁には珍しい大和絵の傑作である。楽翁はこれに自筆の跋文をつけ、「文化二年歳次乙丑十二月二十三日、幕府世臣白河城主越中守源定信識」と記し、石山寺に奉納した。

楽翁公の行蹟については、『桑名市史』においても、「藩主の好學と文教振興」と題する中で特筆されている。先に紹介した『福島県史』の記述と多少重複するが、畏敬する近藤木工先生の執筆にかかるので、一字も改変することなく、次にこれを転載させて頂く。

白河侯松平定信は幼にして穎敏、年甫めて十二才の時、自教鑑を作りて自ら警め、克己の力強く精勵無比でこの時涉獵した書目は一年四百六十余冊の多きに及んだ。（読書功課録）その大経論の方は全く躬行の徳に出で、その徳は読書修養の上になった。退閑後は益々筆硯に親しみ、著作百三十余種に上った。三百諸侯中、著作の多いことは、比肩するものがない。公は夙に六国史の補遺を成さんと志したが、劇職にあるため、檜山義慎に命じ、許多の史籍を参考して編纂せしめ五巻とし、世子定永の時、立教館教授片山恒齋に一本を繕写させた。また好古の趣味深く、歴史の補助となさんため、歴朝の宣旨を始



楽翁公調度品図解 岡本效柴編、自筆
 (『天理ギャラリー』第68回展 松平定信』
 目録より)

め、公卿、武家の諸文書を善く模写分類して古文書部類と名づけ八十二冊におよんだ。(寛政五年の火で半ば焼失)。

徳川時代の考古学には屢々大名が関係して斯学の発展をもたらしたがこの考古学的作業の規模に於て、最初であり最大の事績を残したのはまた楽翁公であった。

「集古十種」はその代表的作品であり、この時代の大出版であり、そして屋代弘賢・柴野栗山という学者が加わって編纂した。即ち諸侯古社寺に存する什物をあまねく模写蒐集し之れを古画肖像・碑銘・鐘銘・弓矢・旌旗・甲冑・刀剣・兵器・楽器・名物古画・印章・文房・銅器・扁額

・弘法大師真蹟七祖識・雪村所摹収 溪玉潤八景・定家卿真蹟小倉色紙の十七部門に分つて一千八百五十九点の遺物を載せて、八十五冊とし集古十種と題した。寛政十二年(一八〇〇)儒臣広瀬典(蒙齋)の序あり、その後編ともなるべき稿本三十八巻(古画類従)があったが、二巻は火災に焼失し、三十六巻中、肖像の部分のみを明治の代に津山藩主松平確堂が刊行したが、主体たる「古画類従」は遂に刊行されなかつた。然し一部分にてもこの書は考古学上の一大著作で、学界に多大の裨益を与えた。公はまた稲山行教に命じて国史家記等により輿車に関する記事を採録せしめ、住吉広行門下の渡辺広輝にそ

の目を明治の代に津山藩主松平確堂が刊行したが、主体たる「古画類従」は遂に刊行されなかつた。然し一部分にてもこの書は考古学上の一大著作で、学界に多大の裨益を与えた。公はまた稲山行教に命じて国史家記等により輿車に関する記事を採録せしめ、住吉広行門下の渡辺広輝にそ

の目を明治の代に津山藩主松平確堂が刊行したが、主体たる「古画類従」は遂に刊行されなかつた。然し一部分にてもこの書は考古学上の一大著作で、学界に多大の裨益を与えた。公はまた稲山行教に命じて国史家記等により輿車に関する記事を採録せしめ、住吉広行門下の渡辺広輝にそ

の図を描かしめ、輿車図考十六巻を撰んだが、これも亦刊行を見ず「古画類従」と共に続集古十種と続く名著が失われたことは遺憾である。

又有名な和漢の墨蹟を撰んで集古墨帖五帖を印刷した。(原本松平家所蔵)、まことに公は藤原貞幹・狩谷掖斎・市河寛斎・西田直養等と共に日本考古学金石学界の偉人と称すべきである。(中略)

公は極めて文学的天才に富み、その随筆花月草紙は凡て百五十六章、記述あり、鑑賞あり、批評あり、文藻の豊かで見識の高いこと随筆中の白眉とも称せらる。又其紀行日記には霞の友、上京日記・甲寅紀行・飯塚温泉紀行等があり、共に退閑雑記に収録されている。一生古筆の源氏物語を七部まで写し、其の折々の感想、人物の評論などを録して源氏日記と名づけている。(中略)

楽翁公の蒐書は、始め楽亭文庫と称し、又の名を白河文庫と云い、文政六年(一八二三)に蔵書二万五千四十巻に及び、嫡子定永が桑名に転封になると、これを桑名城に移して桑名文庫と称し、藩校立教館の利用に資した。蔵書印記には「白河文庫」「楽亭文庫」「桑名文庫」等がある。(同書本篇五〇〜五三頁)

楽翁公が江戸八丁堀の白河藩邸に住んでおられた頃、その邸内に、亜欧堂田善や、蘭学者石井庄助が住んでいてそれぞれに立派な業績を挙げていたことは、本誌48号にすでに記した。

○白河藩江戸上屋敷詰藩士

集古十種の蒐集編纂事業については絵画の項でも触れて、「集古十種の板木は凡て現在桑名市鎮国・守国神社に保存せられている。」と言ひ、更に語を以て「本書出版後、更に材料を蒐集して後篇続板の企あり。これに収入の集古に、古画類従の浄写成つた下絵は仮りに巻軸にして、凡て三十六軸、文化の半ば頃、門部を分けて小袖簞笥に多数分類して納め、目録数十冊を作らしめ、隠栖後、火災を避けるため、大塚集古苑の集古庫に納めおかれた。(玄奘追記)、然し後篇はついに出版に至らなかつた。」と記して、その書の出版に至らなかつたことを惜んでいる。(同書五七三頁)

その後「桑名市史」を購入し得て読了一過、同書補篇、第六章人物・著作の条下に、なお記すべきことがらのあるのに気づいたので、ここに補しておきたい。その記述は簡潔であるが、それらの人々の墓所が、深川靈岸寺中、長専院としてあるのが注目せられる。

その後「桑名市史」を購入し得て読了一過、同書補篇、第六章人物・著作の条下に、なお記すべきことがらのあるのに気づいたので、ここに補しておきたい。その記述は簡潔であるが、それらの人々の墓所が、深川靈岸寺中、長専院としてあるのが注目せられる。

石井庄助 蘭学

旧名馬田清吉、蘭学に長じ、天明六年江戸に來り、白河藩主松平定信公に仕う。

二川昌意 文政七、三十三。藩医

通称菊次郎。水戸の人、華岡青洲の門人。松平定永公に聘せられ、江戸藩邸詰。(江戸深川、靈岸寺中、長専院)

星野文良 文政十二、四十九。画家

名唯美。通称善輔。久松南湖。大野泉祐及文晁門人。定永公の側役。大

小姓。(東京世田谷、常葉寺)

廣瀬蒙齋 文政十二、六十二。儒官
名政典(畧名典)。通称台八、藩校立教館の教授。(東京深川長専院)

浅井礼政 天文学者

通称四郎左衛門。定信公に仕え、江戸邸にあり。曆法粹言、七十二候艸裁術等を著す。

相沢三左衛門 槍術

旅川流槍術に長じ、定信公に仕う。塩谷源之進、砲術

松波龜理 絵師

通称林右衛門。松平定信の臣。文政六年桑名に移る。その画世に珍重さる。

柳川川柳 俳人

通称義右衛門。桑名藩士。号を林夫又林甫と云う。定信公の用人。

星野徐良 画家

通称善輔。文良(前出)の子。画をよくす。

林 松塙 儒者

名は成章、通称良右衛門。白川藩士林克之の子。江戸詰学頭。定永公の侍読。

田内月堂 藩臣

名は親輔。桑名藩の世臣。江戸定詰。松平定信公の近侍。猷公の用人。文を善くす。

加藤紫山 安政三、五十八。儒官

名は胤禎、通称啓次郎。藩教授片山恒斎の弟。昌平校の出身、立教館学頭勤。白川より桑名に移る。(東京深川靈岸寺)

廣瀬養正 安政三、五十八。儒者

通称忠一。広瀬蒙齋の長子。儒学に精通す。(東京深川長専院)

南合果堂 文久三、六十五。

名は琦。通称彦左衛門、南合蘭室の子。広瀬蒙齋門人。昌平校出身、藩学立教館教授に進む。(東京深川長専院)

森 陳明 明治二、四十四。藩臣

名は弥一左衛門、藩の世臣。戊辰役敗北の責を負うて、東京藩邸に自刃。

藤波和子著、『東京掃苔録』に、

陳明(桑名藩士)通称弥一左衛門。慶応四年の乱に、桑名藩罪をうくる

や、陳明身を以て全藩の罪を購ひ、深川の藩邸にて死につく。明治二年十一月十三日、年四十四。辞世。嬉しさよ尽す誠のあらはれて君に代れる死出の旅立
なかなか惜しき命にありながら君の為にはなにとふべき

× × × × × × × × × ×

以上諸家の内、親玉と目すべき人物は、儒者の広瀬蒙齋である。廣瀬蒙齋(一七六八—一八二九)の伝記は、平凡社版『日本人名大事典5』に次のように記されている。

徳川中期、江戸の儒者。奥州白河の人。政則の末子。通称台八。名は典(二に興)。政典、字は以寧、のち仁重、仲謨、蒙齋はその号、寛政三年

に江戸に出て林祭酒の門に学び、また昌平齋に入る。のち西方諸州を歴遊し、九年白河侯に召されて学頭となり、十年教官に遷り、十二年物頭格に進み、禄百石を賜ひ、特に命ぜられて幕政に参与、文化十三年願により参与を免ぜられ、文政六年家を江戸に移す。この年侯は伊勢桑名に転封され、蒙齋も侯に従ひ長柄奉行となる。八年世子傳に転じ、用人に進み、三十石を加増せられ、なほ依然教授を勤めた。十一年病を以て致仕し、十二年二月歿。年六十二。人となり質朴、程朱の学を奉じ、最も文章に長ず。著書に白河古事考、讚藪、筆林、酬夢編、京遊漫草、蒙齋文集、蒙齋存稿、その他十数種があ



松平定信公墓 照源寺 (『桑名市史』補篇より)

る。(岡本)
その著作を、岩波書店刊の『国書総目録』によって補うと、

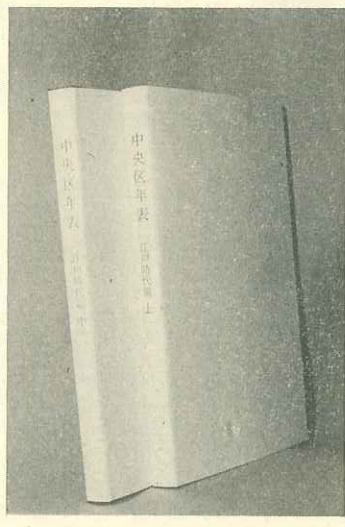
廣瀬蒙齋(政典・典)羽林源公伝、
榮使録、奥州五十四郡考補(文政五)
学思齋詩稿、学思齋目録、蚊やり火、
近治可遊録、御行状記料、扈游録、
再造立教館図序、讚藪編、しがらみ、
使日光録、酬夢編(文化三)、杖屏記、
白河古事考(文政元)、白河古事考撮
要並名勝之図、白河証古文書編、白河
風土記、白河榮翁公伝、白川立教館
敷教条約、玉川碑陰記、轍環録(文政七
)、南湖記、筆林、広瀬蒙齋遺稿、
勿辞楼文集、夢遊編、蒙齋小稿、蒙
齋先生文集(文政二)、蒙齋存稿、有
方録、湯谷十日記、浴恩園図記(寛政
六)
の諸書を掲げてある。
これら諸家のほかにも、『桑名市史』
『本篇第四編の記述中に、桑名藩士で
関流算学に精通した知名の人物として
「不破梅仙」を掲げて、次のように記
している。

勤、…同二年御用人格留守居、同十
二年御役御免、…江戸藩邸を辞して
桑名に帰り、新屋敷に居住、天保四
年(一八三三)八月八日、五十八才で
歿した。右門は文学を好み、舞楽に
通じ、算学に達し、治世献策・宇都
宮解疑・算法応答・音律私考・古今
集俗解・新古集註釈・梅仙詩稿等の
著作があったが、文政十二年江戸八
丁堀の大火で殆んど焼失した。(中
略)梅仙は数学者としては珍らしい
文学愛好家で、その方面の交遊ひろ
く大窪詩仏・屋代弘訓・朝川善庵・
岡本花亭・谷文晁等の詩人、碩学、
画宗等と親交あり。また京都の頼山
陽とも友好があった。山陽の「日本
外史」廿二巻は文政九年(一八二六)
十二月その改削が成って江戸の儒者
間にも頻りにその評判が盛んに行な
われていた。これより先ぎその歳の
四月三日松平定信は致仕して榮翁と
号し、江戸築地に退閑して風流と著
作や読書三昧に余生を送っていた。

折りしも、山陽の友人で当時松平
家の京都留守居役をしていた梅仙の
斡旋から、藩老田内主税の肝煎など
もあって翌年五月二十一日これを公
に献上するの榮を得るに至った。(
不破義幹「桑名昔話」)
【「桑名市史」本篇五六〇～五六二頁】

「中央区年表—江戸時代篇」
有償頒布のお知らせ

昭和五十八年に刊行した『中央区年
表—江戸時代篇上』に引続き、「江戸
時代篇中」が、刊行となりました。
「江戸時代篇」は、『東京市史稿』
の市街篇と産業篇から



- 一、頁数 上二八九頁、中一六八頁
一、部数 五〇〇部
一、頒布場所 京橋図書館 事務室
日本橋図書館
(船場町の三〇一)
月島図書館
(晴海の一の二七)
一、郵送の場合 現金書留(郵送料は切
手と同封、一冊二五〇円 二冊三〇〇円)
一、問合せ 五四三一九〇二五
五四三三〇二二 一内六九一

「中央区史」「中央
区三十年史」の編集委
員をとめ、当誌面でも
毎回江戸の町の歴史
や人物、事跡の紹介に
健筆をふるって
おられる安藤菊二氏の
編集によるもの
です。
今月初めての試みとして
左記の要項
で有償頒布しております。
一、内容 上・天正一八—享保二〇年
中・元文元年—文化二四年
(下巻は六一年度刊行予定)
一、価格 上・中各巻一六〇〇円
一、判型 A5判

◆ 東京を語る会 第48回 予告

日時 五月二四日(土)午後二—四時
演題 江戸みこし談義
講師 林 順信氏
(日本神輿協会相談役)
五月の東京は祭りの季節。『江戸神
輿春秋』の著者である林氏に、スライ
ドをみながら「みこし学のすすめ」を
語っていただきます。お楽しみに。